

パーソンズ以降における社会システム理論の展開

赤坂 真人

The Change and Development of Social System Theory since Talcott Parsons has passed away.

Makoto AKASAKA

Abstract

28 years have passed since Talcott Parsons passed away. When he wrote the book, *The Structure of Social Action* causing a great sensation in Theoretical Sociology, he started to write it with the sentence of death of the theory of Herbert Spencer. Ironically Parsons is confronted with the same question that who now reads Parsons. It is difficult for young sociologists to understand the intellectual excitement caused by him.

In 1960's Parsons theory had lost its influence. Why? According to my personal opinion, firstly, its main cause was not refuted by a lot of criticism but sociologists had lost the interest on general theory of sociology. Secondly, microscopic sociology, for example phenomenological sociology, symbolic interactionism and ethnomethodology began to be popular as a reaction to the grand theory of Parsons.

Probably the cause of inactiveness of current sociological theory is the breakdown of macroscopic sociological theory. How the macroscopic sociological theories have been changing after Talcott Parsons had left from the stage? The purpose of this article is to follow the development and change the social system theory as a macroscopic theory of sociology.

Key words : Social System, Morphogenetic System, Autopoiesis, Cybernetics, Synergetics

キーワード : 社会システム, 自己組織系, オートポイエーシス, サイバネティクス, シナジェティクス

本稿の目的

今日、タルコット・パーソンズの理論が社会学者によって言及されることはきわめて稀である。なぜパーソンズ理論は凋落したのか。私見によれば、パーソンズ理論の凋落は、彼の理論が批判され論破されたからではなく、近年、社会学者、とりわけ若い社会学者の関心がより個別具体的なものに変化し、一般理論に対する関心が低下したためと思われる。筆者のみるところ、現在の理論社会学の停滞は、パーソンズ理論に代わるマクロ社会学理論が存在しないことにその原因がある。パーソンズ以降、マクロ社

会学の主要理論である社会システム理論はどのような発展を遂げたのか。本稿の目的はその変化と発展を明らかにすることにある。マクロ社会学理論の再建は、理論社会学者に課せられた喫緊の課題である。

1 パーソンズ理論は死亡したか。

「現在、誰が一体スペンサーを読むだろうか？スペンサーがかつて世界中にまきおこした興奮の大きさを、現在のわれわれが理解するこ

とは難しい」。⁽¹⁾かつてT.パーソンズは、長らく社会学理論の憲章となった『社会的行為の構造』の執筆を、歴史学者クレイン・ブリントン (Crane Brinton: 1898-1968) による、スペンサー理論 (社会進化論) の死亡宣告から始めた。だが皮肉なことにパーソンズ死後28年たった今、彼は同じ問いを突きつけられている。「今、誰がパーソンズを読むだろうか? パーソンズがかつて世界中にまきおこした興奮の大きさを、現在のわれわれが理解することは難しい」と。

1982年、パーソンズ亡き後、出版されたフランシス・ブリコー (Francois Bourricand) やハンス・アドリアンセンズ (Adoriaansens, Hans P.M.)、ステファン・サベッジ (Stephen Savage P.) らによるパーソンズ関連書の書評を執筆したC.ブライアント (C. Bryant) のタイトルは “Who Now Reads Parsons?” というものであった、⁽²⁾ブライアントがとりあげた書物の執筆者がいずれもヨーロッパの研究者であったことは、裏を反せばアメリカにおけるパーソンズへの関心の低下を象徴していた。パーソンズの晩年、アメリカで熱心にパーソンズを擁護したのは、ジェフリー・C.アレクザンダー (Jeffrey C. Alexander) とジョナサン・H.ターナー (Jonathan H. Turner) くらいなものであったろう。

パーソンズ理論を受け継ぎ、それを発展しようとする試みは、アメリカより、むしろヨーロッパおよび日本のほうが活発であった。日本でパーソンズ理論の研究が始まったのは1950年代後半であり、最初に翻訳されたパーソンズの著書は富永健一によるスメルサーとの共著『経済と社会』であった。その後、東北大学の新明正道や田野崎昭夫、佐藤勉、東京大学の富永健一、小室直樹、京都大学の作田啓一、吉田民人ら、そうそうたる研究者が次々にパーソンズに関する論文や研究書を刊行しはじめたが、皮肉なことにそれが最盛期を迎えた1970年代前半、アメリカではパーソンズ理論に対する激しい批

判が生じ、パーソンズの影響力は失われていた。

日本でも1980年代になるとポスト・モダンが流行語となり、ミシェル・フーコー (Michel Foucault: 1926-84)、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu: 1930-2002)、アンソニー・ギデンズ (Anthony Giddens: 1938-)、ユルゲン・ハバーマス (Habermas Jürgen: 1929-)、ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann: 1927-1998) などが注目されるようになり、パーソンズに言及する研究者は急速に減少していった。だが私見によれば、それは決してパーソンズの業績の解明と理論的成果の吸収が終了したことを意味するものではない。中野秀一郎が指摘するように、「日本でのパーソンズ受容は全体としてはいまだく貧弱> (不十分) なもの」といわざるをえない。⁽³⁾とりわけ日本におけるパーソンズ理論の研究は初期の行為理論に集中しており、中期の社会システム論や医療、家族、政治、宗教、教育といった経験的かつ中範囲の研究に関する整理、分析はほとんどなされておらず、最近になって、ようやくいくつかの著書が出版されたばかりである。⁽⁴⁾

1.2 パーソンズ理論の可能性

今後、パーソンズ理論はウェーバーやデュルケーム、マルクスのように、繰り返し読み返される可能性はあるだろうか。京都大学を定年退官後、非常勤講師として関西学院大学大学院で講義を行った作田啓一は、1987年頃、講義終了後、「現時点で、未だパーソンズを超える社会学者は出現していない」と断言した。だが同じ頃、関西学院大学に客員教授として1年間滞在したトロント大学のアービング・ザイトリン (Irving Zeitlin) は、大学院のゼミで「今後、社会学においてパーソンズ理論が復活する可能性はあるか」との筆者の質問に「絶対にありえない」と断言した。だが彼はユルゲン・ハバーマスの以下の言明をどう解釈するだろう。

マックス・ウェーバー、ジョージ・ハーバート・ミード、そしてエミール・デュルケームが、議論の余地なく社会学の理論史にその名を残したのは、言うまでもなくタルコット・パーソンズの諸業績のおかげである。・・・同時代人のなかで、パーソンズの理論に匹敵する複合性をもった社会理論を展開した人は誰もいなかった。パーソンズは、一九七四年に自分の仕事の回顧録を公表しているが、それから真先に受ける印象は、この学者が無比の理論を構成するために五〇年以上の長きにわたっていかにたゆみなく努力したか、そしてその成果がいかに着実に累積していったか、ということである。抽象性と分節性、個別的な研究分野の文献に同時に目配りすることと結びついた社会理論のもつ視野の広さと体系性、この点に関して、パーソンズが残した業績に匹敵するものはない。確かに、六〇年代の中頃からこの理論への関心は衰え、その上、パーソンズの晩年の業績は、解釈学的、また批判的研究傾向によって一時的に圧倒された。しかし、今日、パーソンズの理論となんらかの関係を持たない社会理論をまじめにとることはできない。(5)

このハーバースの言明で、筆者がもっとも注目する部分は「今日、パーソンズの理論となんらかの関係を持たない社会理論をまじめにとることはできない。」という部分である。というのもパーソンズ以降、注目を集めた諸理論の多くが、いずれもパーソンズの陰画として成立、もしくはアイデンティティを確立したという事情があるからだ。

恐らく最初にパーソンズを批判することによって自らのアイデンティティを確立した学派は、行為の主観的意味をめぐってパーソンズと論争をくりひろげたアルフレッド・シュッツ (Alfred Schutz: 1899-1959)、そしてその流れを汲むピーター・ルードヴィヒ・バーガー (Peter Ludwig Berger: 1929-) の現象学的社会学であろう。近年、この流派は「構築主

義」という名称で再び登壇したが、社会事象が人々の言説によって構築されるという基本的なスタンスは変わっていない。

行為者の主観的状況規定と意味づけ、行為の構造よりも過程に注目するシンボリック・インタラクショニズムも同様である。同派の提唱者ハーバート・ブルマー (Herbert Bulmer: 1900-87) は、*Sociological Inquiry*, 44(4)に掲載されたJ.H. ターナーの論文“Parsons as a Symbolic Interactionist.”に激しく反発し、象徴的相互作用論の立場の独創性を強調したが、⁽⁶⁾パーソンズはブルマーの批判に対し、「ターナーの指摘はおおむね妥当なものであり、自らの行為理論と象徴的相互作用論の諸概念と理論構造は、名称こそ違え、その実質はきわめて類似している。両者が異なったパースペクティブに見えるのは、調査上の戦略と経験的関心レベルが異なるためで、両者の間にはこれまで強調されてきたような差異はない」と断言した。⁽⁷⁾

さらにはパーソンズの弟子でありながら、同時にシュッツに学び、パーソンズ理論を批判して現代社会学の有力なパースペクティブのひとつとなった、ハロルド・ガーフィンケル (Harold Garfinkel: 1917-) のエスノメソドロロジーもパーソンズ理論と深く関連している。ガーフィンケルはパーソンズ流の行為理論の科学的合理性を批判し、日常世界には、日常の相互作用の基礎を構成している独自の合理性が存在する。そして社会学が研究すべきテーマは、この日常生活における行為の合理性を理解することだと主張した。このロジックもまた、パーソンズを対立項として成立していることは言うまでもない。

またパーソンズ理論の「保守主義的傾向」を批判したマルクス主義社会学の系譜からは、ラディカル社会学や抗争理論が登場し、前者のチャールズ・ライト・ミルズ (Charles Wright Mills: 1916-62) やアルヴィン・ウォード・グールドナー (Alvin Ward Gouldner: 1920-

80)、後者のルイス・アルフレッド・コーザー (Lewis Alfred Coser: 1913-2003) やラルフ・ダーレンドルフ (Ralf Dahrendorf: 1929-) らが、前者は主にパーソンズ理論の抽象性やイデオロギー的保守性を、後者は主に抗争、強制、社会変動に関する理論的定式化の欠如を批判した。

ハバーマスが言うように、現代社会学の多くの学派がパーソンズ理論の批判、克服を目指して誕生したとすれば、それらはパーソンズ理論を二項対立の対立項とすることになる。とすれば、もしパーソンズ理論が崩壊してしまえば、彼らもまた自らのアイデンティティを維持することが困難になる。つまり現代社会学の多くの学派が、自らのアイデンティティを再確認し、理論体系の洗練を試みるとき、パーソンズ理論への訴求が不可避となるということだ。⁽⁹⁾

2 パーソンズ以降のマクロ社会学の動向

さてそれでは以上のようなミクロ社会学理論の展開に対し、マクロ社会学理論はどのように対処したのだろうか。すでに述べたように、1980年以降ポスト・モダンを旗印に M. フーコー、P. ブルデュー、A. ギデンズ、J. ハバーマス、N. ルーマンなどの業績が次々に紹介された。しかしこれらの研究者のうち、パーソンズにとってかわるほどの影響力をもった者は誰もいない。

恐らく彼らのうち、もっともパーソンズに近いのは N. ルーマンであろう。本稿では、以下、パーソンズの社会システム理論・機能主義理論を批判的に継承したルーマン、吉田民人、今田高俊の社会システム理論のロジックを要約し、現段階における社会システム理論のフロンティアを描画してみよう。

2.1 社会システム理論の世代区分

わが国において唯一人真正面から「オートポ

イエーシス」理論の解明と応用に取り組んでいる哲学者の河本英夫は動態的均衡システム (恒常性維持システム) を第1世代、動態的非均衡システム (自己組織性システム) を第2世代、そしてフランシスコ・ヴァレラ (Varela, Francisco: 1946-) とウンベルト・R. マトゥラーナ (Maturana, Humberto R.) によって提唱されたオートポイエーシス・システムを第3世代のシステムに分類する。⁽¹⁰⁾

それに対しパーソンズの構造—機能主義を継承し、それに独自の情報理論を加えて情報—自己組織系理論を定式化した吉田民人は、社会科学におけるシステム理論には物理学モデルと生物学モデルがあり、前者の典型が経済学における一般均衡理論であり、後者の典型が社会学の有機体的均衡モデルである。そしてイリア・プリゴジヌ (Ilya Prigogine: 1917-) やハーマン・ハーケン (Herman Haken: 1927-) によって提唱された「自己組織理論」は物理学モデルの最新版であり、「オートポイエーシス・システム」は生物学モデルの最新版であるとする。⁽¹¹⁾

同様にパーソンズの構造—機能主義システムを継承した今田高俊は、それにシステムを構成する要素の「ゆらぎ」と「自己言及 (自省作用)」の概念を組み込み、ミクロとマクロ、ノミナリズムとリアリズム、制御と自律性の統一を意図した独自の社会システム論を展開している。今田はルーマンを除き、それぞれの立場から構造—機能システムに「意味」を組み込み、新たな社会システム論の構築を目指しているハバーマス、ギデンズ、橋爪大三郎らを「自己組織性システム論者」に分類する。

2.2 パーソンズの動態的均衡システム

システム理論は当初、力学的システムの形で物理学や化学といった自然科学の領域で構想された。次にそれは生物学や心理学の領域に持ち込まれ、ウォルター・ブラッドフォード・キャノン (Walter Bradford Cannon: 1871-1945)

のホメオスタシス（生体の恒常性維持）に象徴される有機体的均衡システムとして概念化された。⁽¹²⁾

パレートは力学的システムモデル（物理学モデル）を経済学を持ち込み、経済の一般均衡システムの定式化に成功した。彼はこれを社会に拡大し、社会システムの動的均衡分析を企図したが、その試みは失敗に終わった。ローレンス・ジョーゼフ・ヘンダーソン（Lawrence Joseph Henderson: 1878-1942）を介してヴィルフレード・パレート（Vilfredo Pareto: 1848-1923）の構想を継承したパーソンズは、力学的モデルではなく有機体的モデル（生物学モデル）に依拠して、これにエミール・デュルケーム（Émile Durkheim: 1858-1917）、ラドクリフ・ブラウン（A. R. Radcliff-Brown: 1881-1955）、ブロンスロー・カスパー・マリノフスキー（Bronislaw kasper Malinowski: 1884-1942）などの機能分析の発想を取り入れ、構造-機能的システムモデルを提示し、構造-機能分析の手法を用いてさまざまな社会領域の分析を行った。

すでに述べた通り、パーソンズは1960年にロバート・キング・マートン（Robert King Merton: 1910-2003）の提言に従い、構造-機能分析という呼称を「機能分析」に改めたが、その目的はいぜんとして社会システムの均衡条件の分析にあった。すなわち社会構造の維持に必要な機能要件の析出である。後にこの点をめぐって、①パーソンズの社会システム論はシステムの構造維持に偏っており、社会変動が説明できない、②均衡を重視するあまりシステム内部におけるさまざまな葛藤・闘争を無視しているといった批判がなされた。しかしこれらの批判はパーソンズの社会システム理論にさしたるダメージを与えることができなかった。というのも社会変動は、特定の社会構造が環境に対する適応能力を失った場合、新たな機能-構造の分化が生じ（社会システムの機能-構造変動）、それでも適応できない場合そのシステムは解体

され、新たな機能要件を充足する構造の再構築が生じるという論理で説明が可能だからだ。⁽¹³⁾それによって当該社会システムは、環境に対するより高度な適応能力を獲得する。パーソンズはこの適応能力の高度化を社会システムの進化ととらえた。しかしここでもいぜんとして議論の核心が「社会システムの構造維持」におかれていることに注意しなければならない。

次にパーソンズの社会システムには、内部における葛藤・闘争の視点が欠落しているという批判理論からの指摘であるが、パーソンズはシステム内部に闘争が存在しないとはひとつも述べていない。1951年の『社会体系論』第7章でパーソンズはシステムからの「逸脱」について詳細な考察を行っている。私見ではあるが、この逸脱の分析で、システム内部の闘争をある程度説明できる。パーソンズの社会システムは人間の社会的行為を構成要素とする。とすれば相互行為のネットワークからの行為主体の逸脱は、社会システムに対する行為者のなんらかの不応を示唆する。その中には社会システムからの消極的撤退（たとえばひきこもり）のみならず積極的撤退、すなわち犯罪や闘争（テロや革命）が含まれる。

後期に至りパーソンズは動的均衡維持システムにサイバネティックスのアイデアを取り入れ「情報-エネルギー処理システム」に改訂するが、そのころにはパーソンズ理論の影響力はかなり低下しており、社会学者たちの注目を集めるには至らなかった。それは彼の理論が論破されたというより、一般理論に対する関心の低下、および1970年代中ごろから盛んになった現象学的社会学、シンボリック・インタラクショニズム、エスノメソドロジーなど、いわゆる意味学派の台頭によるものと思われる。その後、社会システム論は動的均衡システムから自己組織性システムモデルへと転換してゆく。

3. 自己組織性システム理論

3.1 吉田民人：サイバネティックスの制御

理論にもとづく自己組織系理論

吉田民人が主唱する情報—自己組織系理論はパーソンズの構造—機能主義システム、とりわけパーソンズが1966年に提示した「情報—資源処理システム」と親和性が高い。吉田の情報—自己組織系における構造生成は「情報プログラム」によって規定される。それはパーソンズの「文化システム（情報）による社会システム・パーソナリティ—システム・行動有機体」のサイバネティック・コントロールと発想を共有する。両者のキーワードは「情報」である。

吉田民人は生物と社会は物理学的「法則」ではなく、それぞれ「遺伝情報（DNA・RNA）＝遺伝的プログラム＝規則」と「シンボル情報＝文化的プログラム＝規則」によって自己組織化がなされるとして、物理学とそれ以外との科学を峻別する。⁽¹⁴⁾吉田の考え方は社会システムの構造化を「規範（行為の仕方を指示する情報）」または「文化（シンボル化された有意味な情報）」に求めるパーソンズと一致する。個人と社会をつなぐものは「情報」であり、情報とは法則ではなく「規則（規範・プログラム等を含む）」であるとする吉田民人の情報—自己組織系理論は、パーソンズと同様、文化決定論と見なすこともできる。しかしパーソンズとの決定的相違は、第1に吉田の情報—自己組織系理論のほうがはるかに緻密で完成度が高いこと。第2に吉田の社会システム理論が「構造維持のくびき」から解放たれており、情報プログラムの変更による社会システムの、より迅速で柔軟な構造生成をイメージさせる点にある。

3.2 今田高俊：シナジェティック（協同現象的）な自己組織性理論

今田高俊によれば、「自己組織性とは、システムが環境との相互作用を営みつつ、みずからの構造をつくり変える性質を総称する概念」で

ある。その際、システムは「環境からの影響がなくても自己を変化させる」という点が重要である。「つまり自己組織性とは変革の原因をみずからのうちに持つ変化《内破による変化》をあらわす」。⁽¹⁵⁾

サイバネティック・コントロールを組み込んだ恒常性維持システムは「システムの制御」を中心課題とする。それは工学的発想であり、社会計画や社会発展の誘導等に有効なシステムモデルである。しかしこのモデルはあくまで「社会」が主役であり、「一人ひとりの営みが社会をつくり変えてゆく」というマイクロレベルの発想が欠落している。⁽¹⁶⁾

そこで今田は不安定な大規模システムで「ゆらぎが多発し、これらが協同的に振る舞う結果、巨視的水準で新たな秩序形成がなされるシナジェティクス（synergetics：協同現象）」という発想に基づき、制御中枢によるサイバネティックな制御を前提としないシステムモデルの構築を試みる。このモデルではシステムを分析する視点がシステム全体ではなく、システムの部分に置かれている。そしてシステムのゆらぎを秩序に変換する仕組みを「自己言及作用」と呼ぶ。⁽¹⁷⁾

「自己言及図式」とは部分の相互作用により全体の秩序が形成される側面に照明をあてるパースペクティブであり、この問題に本格的に取り組んだのがオートポイエーシスの理論であった。河本は自己組織性システムとオートポイエティック・システムとを、それぞれ第二世代、第三世代に区別するが、今田は両者を「ともに要素のふるまいに焦点をあてた自己言及の仕組みを扱う」同類のシステムであると主張し、区別しない。⁽¹⁸⁾

今田によればオートポイエーシスの例として昆虫の変態（metamorphose）が用いられる。すなわち青虫からサナギ、蝶へと変態しても有機構成（生命組織）は不変に保たれるというたとえである。だがこのたとえは自己組織性システムの隠喩としてこそふさわしい。「変態は環

境に適応しておこなわれるのではない。それは所与の環境条件の下で、内破の力によってみずからの構造を変える自己組織化である」。(20)

今田高俊の社会システム理論には①ゆらぎを秩序の源泉とみなす。②創造的個の営みを優先する。③混沌を排除しない。④制御中枢を認めないという4つの原則が存在する。(21)

まず「ゆらぎ」という概念であるが、今田によればこの「ゆらぎ図式」がシナジェティック(協同現象的)なシステム理論の中心概念である。ここで彼が強調したいことは、ゆらぎにはでたらめで偶然的なものもあるが、系統的な歪みを持ったゆらぎが存在し、そのような系統性をもったゆらぎは新たな秩序の形成に向かうという点である。

2番目の「創造的個の優先」とは「個々人の差異化の協同現象により新たなパターンが形成されること」を意味する。これまでの「個と全体」、「システム—状況」図式では、明らかに個(部分)は全体に従属する立場に置かれていた。しかし今田の社会システム理論ではこれを逆転し、全体ではなく個による差異化の協同によって新たなパターンが形成される側面に着目する。

3番目の「混沌を受け入れる」とは、カオスの新秩序形成能力を意味する。たとえば先にサイバネティックな自己組織性システムを提唱した吉田民人が、唯一科学的法則が成立する学問分野であると規定した物理学の世界を考えてみよう。そこでは物質が法則にしたがって運動を繰り返しており、説明のために新たな物理学的法則を必要とする「ゆらぎ」が頻繁に発生しているとは考えられない。その意味で新たな秩序はカオス(混沌)の中からこそ生成する。

最後の原則である「制御中枢を認めない」は、「創造的個の優先」と同様、「個」の「全体」に対する従属を転倒させる視点であり、制御中枢を欠いた部分の協同現象から秩序が生成する点を強調するものである。サイバネティクスとの比較で言えば、この原則がもっとも重

要であり、かつ現実の組織を考える上でも重要な視点である。制御中枢、たとえば軍隊でいえば指揮官、スポーツで言えば監督、会社でいえば最高責任者といった司令塔を欠いた組織が実際に存在し、しかも従来のサイバネティックな組織よりも効率的であるとすれば、この原則は伝統的な組織論に大きな変革をもたらすに違いない。(22)

3.3 ゆらぎと自己言及

今田の提唱するシナジェティックな自己組織性のキーワードは第1に「ゆらぎ」、第2に「自己言及」である。この概念についてももう少し補足しておこう。まず「ゆらぎ」であるが、今田はしばしばこの用語に「逸脱」という言葉をあてている。かなり厳格に統制された社会システムにおいてさえ、すべての個人が完全に社会規範に従って行為しているわけではない。かつてわが国における配偶者選択には一定のパターンがあった。配偶者選択には自由結婚とお見合い結婚があるが、ここでは前者を例に今田のいう「ゆらぎ(逸脱)」を説明しよう。

わが国における1~2世代前の自由結婚には、旅行先で出会ったり、友人に紹介されたり、職場が同じといったことをきっかけに二人の男女が出会い、お互いが相手に好意をもてば一定期間交際を続け、機が熟すと男性がプロポーズし、女性が承諾すれば正式に婚約。結婚とともに同居を開始するといったパターンがあった。ちなみにこの一連の過程において婚約まで、または挙式まで性的関係に対する規制があったことにも留意せねばならない。

だが時代を経るにつれてこの一連の行為システムのあちこちに「ゆらぎ(逸脱)」が生じた。たとえばひとりではなく複数の異性と同時に交際したり、婚約しないまま同棲したり、婚約どころか出会ったその日に性関係を結んだり、未婚のまま出産したり、親族・友人を招いての結婚式を挙げないといった行為である。これらの逸脱は、少数派である間は世間の冷淡な視線に

晒されるが、システムからの逸脱のメリットが認識されて徐々に浸透し（ゆらぎの増幅）、多数派に転換したとたん、新たに生成した行為システムとして社会的に認知される。このようなゆらぎの増幅による新たな行為システムの生成は計画されたものでも、制御されたものでもない。

次に「自己言及（self-reference）」であるが、自己言及とは「自らの行為や作用を自己に回帰させること」を意味する。今田は自己言及に「自省作用（self-reflection）」という語をあてる。⁽²³⁾自省という用語には反省といったネガティブな意味が含まれるが、ここで言う自省作用は自らの行為と結果を観察し、そこから得られた情報を自己回帰させ、フィードバックのように既定の目標値に近づけるよう制御するのではなく、自己回帰した情報を既定の目標の全面的改訂を含む、新たな構造生成に利用するというポジティブな意味で使用される。自己組織性理論では「自己言及」の問題を「自己触媒・自己促進反応」として扱うが、「自己触媒・自己促進反応」とは自己回帰した情報が既定の目標値からのゆらぎを強化する方向へ作用する状態をさす。そしてすでに述べたように、この概念を最初に提示したのがフランシスコ・ヴァレラとウンベルト・マトゥラーナによるオートポイエーシス理論であった。

3.4 N. ルーマン：オートポイエーシスとしての社会システム

オートポイエーシス（Autopoiesis）という概念はチリの神経生理学者 H. R. マトゥラーナがギリシャ語のオート（autos: 自己）とポイエーシス（poiein: 製作）を組み合わせて創った言葉で、自己産出や自己創造と訳される。⁽²⁴⁾

今田高俊の言葉でいえば、オートポイエーシスとは①システムを構成する諸要素がシステムを構成する諸要素によって再生産されること。②この再生産は回帰的なネットワークによって閉じており、それがシステムの自律性をもたら

している状態をいう。さらに縮約して言えば、オートポイエーシスとは「システムの要素を、当のシステムを構成する諸要素のネットワークの中で再生産していく」ことで、⁽²⁵⁾自らを具体的統一体として維持することである。これに対しシステムとしての自律性をもたず、外部からの情報とエネルギーの入力なしには作動しないシステムはアロポイエーシス・システム（allopiesis system）と呼ばれる。アロ（allo）とはギリシャ語で「他のものによる」という意味で、アロポイエーシス・システムとは「他のものによる創造」を意味する。⁽²⁶⁾たとえば自動車やコンピュータを例に考えてみよう。自動車は自らの力で部品を組み立て産出されるわけではないし、完成品としての自動車も人間がガソリンというエネルギーと運転に関するさまざまな情報を入力しなければ作動しない。同様にコンピュータも電力エネルギーとプログラム情報、人間による情報入力、操作がなければ作動しない。

ヴァレラとマトゥラーナはオートポイエーシス・システムの特質として、「自立的」・「個性性」・「統一体」・「入出力の欠如」の4つを指摘する。自立的であるとは、システムの形態が変化しようとも、その有機構成（生命組織）が維持されることである。個性性とは構成要素を自己産出することで有機構成を不変に保つことである。統一体であるとは、構成要素の自己産出過程においてみずからの境界を決定することである。そして最後に入出力の不在とは、システムの構成要素の作動を内部からみた場合に認識される特質である。たとえば細胞の分裂による自己産出において、意識をもたない細胞は、細胞分裂を促す働きかけを入力と認識しているわけではないし、新たに生まれた細胞を出力として意識することもない。それを「細胞生成システムの入出力」と認識するのは外部観察者である。⁽²⁷⁾

ルーマンはオートポイエーシス理論に基づいて、コミュニケーションを構成要素とする社会

システム理論を展開した。社会システムはコミュニケーションによって産出されるシステムであり、コミュニケーションは自らを再生産することによって新たなコミュニケーションの連鎖を産出する。コミュニケーションの構成要素はコミュニケーション・システムの成立と同時に決定され、その構造はその都度その都度変化する。ゆえに社会システムの境界も構造が変化するたびに再規定される。その結果、オートポイエーシス・システムは「構造維持の呪縛」から逃れることが可能となる。コミュニケーションを構成要素とする社会システムはコミュニケーションの産出と接続によって絶えず再生産される。逆に言えばシステムがコミュニケーションの産出を停止した場合、そのシステムは終焉または完結したものとみなされる。⁽²⁸⁾このシステムはひとつの閉域を形成しており、入力も出力も存在しない。

先に①自立的。②個性性。③統一性。④入出力の不在というオートポイエーシスの4つの特徴をあげた。このうち自立性（生命組織の維持）、個性性（構成要素の自己産出）、統一性（境界の決定）は従来の恒常性維持システムと比較して、さほど隔たりのある特質とも思えない。しかし最後の入出力の不在は従来のシステム理論には見出せない性質である。

たとえば社会システムを閉じられたコミュニケーションのシステムとした場合、われわれは通常、時間的に先に発せられた発話が他者の思考回路に対する入力であり、それを受けて発信されたメッセージを出力であると考えよう。しかしそう考えるのは彼らのコミュニケーションを外部からみている観察者であり、コミュニケーションの当事者は入出力を意識していないとも言える。だが細胞の自己産出にしても、人間同士のコミュニケーションにしても、外部観察者の観点から見れば、システムへの入出力は存在する。この点に関してヴァレラは後に、「システムには入力も出力もあるが、入力や出力はシステムの在り方を直接決定しない」

と述べ、入出力の不在を否定している。⁽²⁹⁾

システムへの入出力の不在または閉鎖性について馬場靖男は、たとえば前近代において法は法の外側にある、次元を異にする包括的審級（宗教や道徳）に支えられていた。しかし近代社会においては「法は法として」それらとの関係を断ち切り、自らの論理によって自己を支える「法システム」として閉じてしまった。したがって法はその妥当性を宗教や道徳ではなく、法の内部（法によって定められた手続きによって制定・執行されるという事実）に求めなければならなくなった。ゆえに現代社会における法は、法によってのみ再生産されるオートポイエティックなシステムになったとパラフレーズする。⁽³⁰⁾

ルーマンのオートポイエーシス・システムに対し、今田高俊は「ルーマンは近代社会を、高度に機能分化を遂げたシステムとして規定する。・・・そして現在、政治・経済・文化・法・学問・宗教などの機能的部分システムが完全分化を遂げ、それぞれの作動が自律的な『閉じ closure』を持つようになった。このため、各部分システムは、オートポイエティックに作動しあっているだけで、どの部分システムも社会全体を制御できない状態になっている」と主張する。だが全体社会の制御が困難になったのは社会のサブシステムが高度に分化したためではなく、機能の代替や複雑性の縮減が追いつかないほどの社会分化が生じてしまったためである。そもそも「複雑性の縮減」は制御の視点から派生した概念であり、これをサイバネティクスとは正反対のオートポイエーシスと結びつけることはできないと痛烈に批判する。⁽³¹⁾

この批判に対し、機能の代替や複雑性の縮減が追いつかないほどの社会分化が生じたからこそより高度な「複雑性の縮減メカニズム」が必要なのだとの反論が可能だが、そのような反論はあまり意味がない。むしろ筆者にとっては、社会システムの機能的サブシステムはほんとうにルーマンが言うように「閉じる」ところまで

分化を遂げたのかに関して疑問が残る。また今田の自己組織性システムに対しても、ほんとうに制御メカニズムを持たない社会システムの自律、存続が可能かという疑念が払拭できない。

3.5 自己組織性システム理論の課題

今田は自己組織性システム理論をサイバネティックな理論とシナジェティックな理論に区別して考察する。彼が後者の立場をとっていることはいうまでもない。サイバネティックな理論は、新たに生成する構造も「制御・被制御」を前提とせざるをえない。だがシナジェティックな理論は制御のくびきから解放される代わりに「偶然性」のリスクを負う。ゆらぎが常に全体システムにとって有益な方向へ向かうとは限らないからだ。社会システム上の重要な問題を「偶然や出たところ勝負」に委ねるわけにはゆかない。

そこで今田はこの問題の解決にあたって「自省作用」に着目する。一方で適切な自省作用（もう一人の自己との対話）が作動すれば、行為者は新たな情報をフィードバックし、無用なフィードバックの繰り返しを回避できる。他方、適切な自省作用はゆらぎの「偶然性」の危険を低減するというわけだ。今田によれば、現代の生命科学の知見によれば、進化は従来考えられてきたほど偶然的・盲目的なものではない。生体構造は遺伝情報だけで決定するにはあまりにも複雑すぎる。ゆえに生命は環境のなかで遺伝情報を選択的に利用し、自己組織化を遂げると考えられる。同様に社会システムのゆらぎも、それほど盲目的なものではない。もちろん例外はあるが、それは自省作用と結びついたゆらぎであり、新秩序形成を可能とするゆらぎである。⁽³²⁾

サイバネティックな自己組織性理論は、指令中枢による上からの制御および構造の構築という視点に立つ。他方、シナジェティックな自己組織系理論は、システムを構成する要素の自律性を重視し、要素間の協同による構造生成を

主張する。双方の理論はマクロとミクロ、リアリズムとノミナリズム、全体的システムによる制御と構成要素の自律性という二項対立を形成する。ルーマンや今田や橋爪らの社会システム論の彫琢は、これらの二項対立を解消し、ひとつの理論に収斂させようとする試みである。彼らは一連の理論的彫琢によってどのような社会を描画しようとしているのだろうか。この問いに対しては馬場靖雄が的確な指摘を行っている。

「多様性と流動性」こそが、あるいは「多様なものの共存と相互作用」こそが、現在の社会学理論におけるキーワードだとはいえないだろうか。社会を固定的な価値や構造（例えば、パーソンズの AGIL）によって制御されるものとしてではなく、多様な諸要素のそれぞれ自律的な運動が、複雑に交錯するなかで生成しては不断に変化してゆくような流動体としてとらえること。要するに、ソフトかつフレキシブルな社会というイメージである。⁽³³⁾

たしかに現代社会にはインターネットの普及による組織のフラット化、多種多様な NGO の生成と活動、さまざまな分野における規制緩和、伝統的社会規範のゆらぎなど、社会構造の流動化を示す現象が数多く見出される。だが指令中枢の欠如が社会を再び混乱に陥れることはないのか。混乱の反動として過剰な社会統制が復活することはないのか。制御と自律性の相克を調整するメカニズムは未だ論じられていない。

注

- (1) Parsons, Talcott, *The Structure of Social Action: A Study of Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, New York: McGraw-Hill, Reprinted edition, 1949. (稲上毅・厚東洋輔訳, 1974-1989 『社会的行為の構造』全5巻, 木鐸社) p.17
- (2) Bryant, C., “Who now Reads Parsons” *Sociological Review*, 31.
- (3) 中野秀一朗, 1999, 『タルコット・パーソンズ—最後の近代主義者—』東信堂, p.129. 本書の中で中野はロバートソンとターナー (Robertson, R and Bryant S. Turner, ed. *Talcott Parsons: Theories of Modernity*. London) を引用し、パーソンズ解釈の貧困さを提示している。「パーソンズは、一九七九年にミュンヘンで客死するが、かれが今世紀のもっとも重要で影響力のあった社会学者であったことは広く認められている。にもかかわらず、その学問的業績の評価をめぐって激しい論争が付きない。パーソンズは今もしばしば単純で一面的な批判に晒されているが、こうした評論はかれの理論的、経験的、道徳的関心の広がりや平気で無視しているのである。こうして、多くの点でパーソンズ解釈の問題はいまだその幼少期にあるとっていい。」(中野秀一朗, 1999, 同書, Pp.104-105).
- (4) 高城和義, 『アメリカの大学とパーソンズ』(1989)、『医療社会学』(2002) や進藤雄三, 『近代性論再考 パーソンズ理論の射程』(2006) など。
- (5) Habermas, Jürgen, 1981, *THEORIE DES KOMMUNIKATIVEN HANDELNS*. Bd. 1, 2, Suhrkamp Verlag, Frankfurt/Main.: *The Theory of Communicative Action*, Bacon Press.vol. 1, 1984. vol. 2, 1987 (河上倫逸他訳, 1985-1987 『コミュニケーション的行為の理論 (下)』未來社, Pp.130-1.)
- (6) Parsons, Talcott, “Exchange on Turner, Parsons as a Symbolic Interactionism” *Sociological Inquiry*, 45(1).
- (7) Parsons, Talcott, *ibid.*
- (8) このことは決して単なる論理的な類推ではない。筆者の主観的判断だが、2001年度、第52回関西社会学会の社会学理論に関するシンポジウムで、まさにこの事実を実証する出来事が生じた。理論社会学を専攻する研究者が基調報告を行った後のパネリストによる討論で、エスノメソドロロジーの立場をとるパネリストが中心となってマクロ社会学理論を批判していた。ところが議論の流れでたまたまマクロ社会学理論を擁護する立場におかれてしまったパネリスト (彼もまたミクロ志向のシンボリック・インタラクショニストであった) が、「あなた方はマクロ社会学理論が厳然とそびえているかの如く語っているが、現代社会学において、そのような確固としたマクロ社会学理論は存在しない」と述べたことで討論が空中分解してしまった。対立項が存在しなければダイアログは成立しない。ミクロとマクロを弁証法的に対立させ、これを統合するかたちでの止揚を目指すなら、説得力のあるマクロ社会学理論の再建が不可欠である。
- (9) 河本英夫, 1995, 『オートポイエシス—第三世代システム』青土社参照。
- (10) 吉田民人・鈴木正仁, 1995, 『自己組織系とはなにか』ミネルヴァ書房, Pp.22-4.
- (11) それは臨床心理学にも導入された。たとえばE. メーヨーは、人間が正常に行動できるのは心理的な均衡状態が保たれている場合に限られると主張し、精神的な不均衡状態 (mental disorder) の再均衡化を臨床心理学の課題のひとつとした。
- (12) このロジックを明確に提示したのは富永健一である。(富永健一, 1995, 『行為と社会システムの理論: 構造—機能変動理論をめざして』東京大学出版会.)
- (13) 吉田民人・鈴木正仁, 1995, 前掲書, Pp.29-32.
- (14) 今田高俊, 2004, 『自己組織性と社会』東京大学出版会, p.1. 「内破」の事例として「メタモルフォーゼ: 変態」が挙げられるが、場合によっては「個体発生」のほうが適切であるかもしれない。個体発生は種としての次元で系統発生を繰り返すが、それはあらかじめ個体発生の中に系統発生のプログラムが入れ子となって存在しているからである。
- (15) 今田高俊, 2004, 同上書, p.3, 22.
- (16) 今田高俊, 2004, 同上書, p.7.
- (17) 今田高俊, 2004, 同上書, p.11.

- (20) 今田高俊, 2004, 同上書, p. 10.
- (21) 今田高俊, 2004, 同上書, Pp. 28-34.
- (22) 今田は非管理型のチームづくり (通念を打破したチームメイク・アドリブラクビー・監督制の廃止など) によって、日本選手権7連覇の偉業をなした神戸製鋼ラクビーチームの事例研究を紹介しているが、このような事例をさらに積み重ねてゆくことができれば、今田高俊が提唱するシナジェティックな自己組織性理論の説得力はさらに高まるだろう。(今田高俊, 同上書, Pp. 224-37.)
- (23) 今田高俊, 2004, 同上書, Pp. 35-7. 本来、自己言及とは「ある命題が、その命題自身に言及すること」を言う。たとえば「ソクラテスは5文字である」という命題は、自らが自らの命題の内容に言及している。だが今田は「自己言及 (自省作用)」をG.H. ミードのIとMeとの対話、H. ブルーマーでいえば「もう一人の自己との相互作用」を自省作用の事例としている。
- (24) 河本英夫, 2000, 『オートポイエーシスの拡張』青土社, p. 8. 「オートポイエーシス・マシンとは、構成素が構成素を産出するという産出 (変形および破壊) 過程のネットワークとして、有機的に構成 (単位体として規定) されたシステムである。このとき構成素は、次のような特徴を持つ。(i) 変換と相互作用をつうじて、自己を産出するプロセス (関係) のネットワークを、絶えず再産出し実現する。(ii) ネットワーク (システム) を空間的に具体的な単位体として構成し、また空間内において構成素は、ネットワークが実現する位相的領域を特定することによってみずからが存在する」(Maturana H.R. & Varela F.J., 1980. *The Realization and Cognition: The Realization of The Living*. D. Reidel publishing Company. 河本英夫訳, 1991, 『オートポイエーシス——生命とはなにか』国文社. Pp. 70-1.)
- 河本によれば、この定義には4つのポイントがある。①システムは、産出プロセスのネットワークである。②要素はシステムによって産出される。③自分で産出した構成素 (産出物) を用いて、システムは再度自分の動きを作り出す。④この要素は特定の空間内に場所を占める。あるいはそれが存在する場所を位相化する (河本英夫, 2000, 『オートポイエーシスの拡張』青土社, Pp. 12-3.)
- (25) 鈴木広・嘉目克彦・三隅一人編, 2000, 『理論社会学の現在』ミネルヴァ書房, p. 264.
- (26) 河本英夫, 2000, 『オートポイエーシス2001』新曜社, Pp. 86-7.
- (27) 今田高俊, 2004, 前掲書, p. 23.
- (28) 村中知子, 1996, 『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣, Pp. 36-7.
- (29) Varela F.J., 1979, *Principles of Biological Autonomy*, Elsevier North Holland, Inc, Chapter 1 参照。(河本英夫, 2000, 『オートポイエーシス2001』新曜社, p. 83)。マトゥラーナは繰り返しこの概念を使用するが、河本英夫によれば、要するに彼の真意は「あきらかにシステムにはさまざまな外的入力はある。その場合でもシステムの特定の作動状態が外的原因に依存するのか、内部からそれじたいの活動をつうじてもたらされたのかを区別することができない」ということだと主張する。(河本英夫, 2000, 同上書, p. 88.)
- (30) 鈴木広・嘉目克彦・三隅一人編, 2000, 前掲書, p. 262. 馬場がこのようにシステムの自己完結性をパラフレーズしているからといって、彼がルーマンの見解に賛同しているというわけではない。逆に彼はオートポイエーシスを自己言及によって自らのアイデンティティを支えるというトートロジカルで、空虚な理論と見ている。
- (31) 今田高俊, 2004, 前掲書, p. 25-7. 鈴木広・嘉目克彦・三隅一人編, 2000, 前掲書, p. 38. しかしながら今田は、ルーマンが1984年に出版した『社会システム論』で、意味を「複雑性の縮減」を可能にする中核的要素とするだけでなく、「自己言及」の概念と関連づけた点に関しては肯定的に評価する。すなわち、これによって意味が単なる機能主義的な「複雑性の縮減」メカニズムから、自己差異化する運動体になったと主張する。われわれは他者との差異に言及することで自他を区別する。同様に社会システムもまた、意味によって産出される差異を自己回帰させることによって自らと環境との境界を区別する。この絶えざる自己言及による差異化により、絶えざる社会システムの構造生成と境界決定 (=環境との差異化=システムによる複雑性の縮減) が確保されるというわけだ。(今田高俊, 2004, 同上書, Pp. 120-1.)
- (32) 今田高俊, 2004, 同上書, p. 37.

(33) 鈴木広・嘉目克彦・三隅一人編, 2000, 前掲書, p.262.

文 献

- Adoriaansens, Hans P.M., 1979, "The Conceptual Dilemma.", *British Journal of Sociology*, vol.30, No. 1, March.
- , 1980, *Talcott Parsons and the conceptual Dilemma*, Routledge and Kegan Paul.
- Alexander, Jeffrey C., 1978, "Formal and Substantive Voluntarism in the Work of Talcott Parsons.", *American Sociological Review*, vol. 43, 1978.
- , 1982-1983, *Theoretical Logic In Sociology*, 4 Vols. University of California Press.
- Alexander, Jeffrey.C.,(ed.), 1985. *Neofunctionalism*, Sage.
- 馬場靖雄, 2001, 『ルーマンの社会理論』勁草書房.
- Bourricand, Francois, 1977, *L'individualisme institutionnel : Essai sur la sociologie de Talcott Parsons*, Presses Universit es de France (G.A. Goldhammer, trans., 1981, *The Sociology of Talcott Parsons*, University of Chicago Press.)
- Bryant, Christopher, 1982, "Who Now Reads Parsons.", *Sociological Review*, 31.
- Buxton, William, 1985, *Talcott Parsons and the Capitalist Nation-State : political Sociology as a Strategic Vocation*, University of Toronto Press.
- Collins, Randall and Makowsky, Michael, 1984, *The Discovery of Society*, 3rd. (ed.), Random House (大野雅敏訳, 1987, 『社会の発見』東信堂.)
- Demerath III, N.J. and A. Peterson, (ed.), 1967, *System, Change and Conflict*. Free Press.
- Durkheim,  mile, 1895., *Les R gles de la m thode sociologique*, F.Alcan,Paris. (宮島喬訳, 1978, 『社会学的方法の規準』岩波書店.)
- Fararo, Thomas J, 1989, *The Meaning of General Theoretical Sociology*, Cambridge University Press. (高坂健次訳, 1996, 『一般理論社会学の意味－伝統とフォーマライゼーション』ハーベスト社.)
- Habermas, J rgen, 1981, *TEORIE DES KOMMUNIKATIVEN HANDELNS*. 3Bde, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main. (河上倫逸他訳, 1985-87, 『コミュニケーション的行為の理論(上)(中)(下)』未來社.)
- Hamilton, Peter, 1983, *Talcott Parsons*, London and New York : Tavistock.
- 今田高俊, 1986, 『自己組織性――社会理論の復活――』創文社.
- , 2004, 『自己組織性と社会』東京大学出版会.
- Kneer G.& Nasserite A., *Niklas Luhmann Theorie sozialer Systeme, Eine Einf hrung*, (Uni-Taschenb cher Wilhelm Fink Verlag Munchen, 1993. (館野受男, 池田貞夫, 野崎和義訳, 1995, 『ルーマン 社会システム論』新泉社.)
- 河本英夫, 1995, 『オートポイエーシス――第三世代システム』青土社.
- , 2000, 『オートポイエーシス2001』新曜社.
- , 2000, 『オートポイエーシスの拡張』青土社.
- Lilienfeld, R., 1978, *The Rise of System Theory*, John Wiley & Sons.
- Luhmann, Niklas, 1981, "WIE IST SOZIALE RDNUNG M GLICH" from *GESELLSCHAFTS STRUKTUR UND SEMANTIK*, Suhrkamp Verlag. (佐藤勉訳, 1985, 『社会システム理論の視座』木鐸社.)
- , 1984, *SOZIALE SYSTEME : Grundri  einer allgemeinen Theorie*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main. (佐藤勉訳, 1993, 『社会システム論』(上) 恒星社厚生閣.)
- Maturana Humberto R. & Varela Francisco J., 1980. *The Realization and Cognition : The Realization of The Living*. D. Reidel publishing Company. (河本英夫訳, 1991, 『オートポイエーシス――生命とはなにか』国文社.)
- M nch, Richard, 1981, "Talcott Parsons and the Theory of Action I. The Structure of the Kantian Core.", *American Journal of Sociology*, vol.86. Pp.709-39.

- 村中知子, 1996, 『ルーマン理論の可能性』 恒星社厚生閣.
- 中久郎, 1989, 『機能主義の社会理論』 世界思想社.
- 中野秀一朗, 1999, 『タルコット・パーソンズ—最後の近代主義者—』 東信堂.
- Parsons, Talcott, 1937, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, New York: McGraw-Hill. (稲上毅・厚東洋輔訳, 『社会的行為の構造』 全五巻, 木鐸社 [1974-1989].)
- , 1945, “The Present Position and Prospects of Systematic Theory in Sociology,” in Gurwitsch G. and Moore Wilbert E. (ed.), *Twentieth Century Sociology*, New York: Philosophical Library, 1945. Reprinted in *Essays in Sociological Theory* (1949.)
- , 1951, *The Social System*, *The Free Press*. (佐藤勉訳, 1974 『社会体系論』 青木書店.)
- , 1966, *Societies: Evolutionary and Comparative Perspective*, New Jersey: Prentice-Hall. (矢沢修次郎訳, 1971, 『社会類型—進化と比較』 至誠堂.)
- , 1977, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, *The Free Press*. (田野崎昭夫監訳, 1992, 『社会体系と行為理論の展開』 誠心書房.)
- , 1978, *Action Theory and the Humane Condition*. *The Free Press*.
- Savage, Stephen P., 1981, *The Theories of Talcott Parsons: The Social Relation of Action*. London: Macmillan. Press.
- 進藤雄三, 1986, 「パーソンズの社会システム論」 中久朗編著 『機能主義の社会理論』 世界思想社.
- , 2006, 『近代性論再考 パーソンズ理論の射程』 世界思想社.
- 鈴木広・嘉目克彦・三隅一人編, 2000, 『理論社会学の現在』 ミネルヴァ書房.
- Turner, Jonathan H., “Parsons as a Symbolic Interactionist: A Comparison of Action and Interaction Theory.”, *Sociological Inquiry*, 44(4), Pp.283-94.
- 富永健一, 1993, 『現代の社会科学者: 現代社会科学における実証主義と理念主義』 講談社学術文庫.
- , 1995, 『行為と社会システムの理論: 構造—機能変動理論をめざして』 東京大学出版会.
- 友枝敏雄, 1998, 『モダンの終焉と秩序形成』 有斐閣.
- Wrong, Dennis Hume, 1961, “The Over socialized Conception of Man in Sociology.”, *American Sociological Review* 26: Pp.183-93.
- 吉田民人・鈴木正仁, 1995, 『自己組織系とはなにか』 ミネルヴァ書房.